



終末からの出発 : 雑誌『終末から』（筑摩書房）解題と執筆者一覧

徐, 翌

(Citation)

国文学研究ノート, 60:37-57

(Issue Date)

2021-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLDOI)

<https://doi.org/10.24546/81012914>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012914>



終末からの出発——雑誌『終末から』（筑摩書房） 解題と執筆者一覧

徐 翌

一、小松左京と『終末から』

折しも来訪者あり。——「終末から」てう、聞くだにたちまちつぶれそうな名の雑誌の編集者なり。例によつて断り切れぬ優柔不断、創刊号よりの連載強引にひきうけさせられ、（略）ともあれ、とばしとばしの連載なれども、号を重ね、回を連ねる事一年にして、雑誌はとどこおりなく廃刊となり、「終末から」終末へと、めでたく回歸して円環構造を完うせり。やれうれしやとほつと一息つく間もなく、ここに筑摩書房なる奇特の書肆ありて、この記事まとめて一卷にせんと申し出でらる。

右の戯文は、小松左京の著書『おしゃべりな訪問者』（筑摩書房、75・7）に付された序言「口上」の一節である。小松がこの「口上」でユーモアに満ちた語調で語るように、本作は聞き手が「英吉利のうみし近代SFの開祖、H・G・ウェルズ、大人が記録にとどめたる、時間機械」に乗りこみ、「歴史上のい

ろんな人物の「いんたあづいゆう」を行うというパロディカルな作品である。日本の終末を描いた『日本沈没』（光文社、カッパ・ノベルス、73・3）の刊行直後に著された。「架空インタビュー」と銘打たれた本書は、同じく筑摩書房から刊行されていた雑誌『終末から』連載の六篇に、「北山鳴動」の章を書き下ろしとして加え、一冊にまとめたものである。

隔月刊の雑誌『終末から』は、筑摩書房より一九七三年六月に創刊され、以後偶数月の月末に刊行、翌年一〇月に九号をもつて終刊となった。定価は終刊号の特別定価五〇〇円（頁数も約百頁の増幅有り）以外、三八〇円。編集者は原田奈翁雄である。執筆陣は、野坂昭如、赤瀬川原平、開高健、小松左京、中井英夫、埴谷雄高、種村季弘、石原慎太郎などといったSF文学・幻想文学・異端文学・前衛芸術に跨り、純文学作家・評論家・政治家も巻き込んだ。後に第二回日本SF大賞を受賞し、七八万余部のベストセラーとなった井上ひさしの『吉里吉里人』（本誌一八号、『小説新潮』78・5〜80・9↓新潮社、81・8）が最初に連載されたのも、この雑誌だった。

表紙は終刊号まで、一貫してセピア色を基調として装幀されており、表紙と目次には東君平（一、二号）と味戸ケイコ（三号以降）のイラスト作品が採られた。一、二号では観音開きの目次に続き、八頁分一メートルに及ぶカラーポスター「豪華絢爛長尺絵巻」が折り込まれている。それぞれ、横尾忠則「千年王国」、および林静一「光夢恋」である。三号のグラビア頁では「終末歌情」という歌謡曲とイラストを組み合わせたイラスト歌集が編まれている。このように『終末から』は、文学と地下文化的な芸術のコラボレーションの一面を覗かせており、末世的なイメージの強い植え付けが特徴的である。

一九七〇年代は終末的な思想が文学や芸術などの諸方面で流行した。小松左京の『日本沈没』は終末論の時代の産物でもあった。そして、その上梓によって終末論ブームは点火された。『日本沈没』の出版直後に、『終末から』の主要執筆者として迎えられた小松は、終末論ブームの渦中にさらに巻き込まれ、そこで議論される日本を取り巻く終末的な話題を横目で見ながら、SFの手法を駆使し、歴史文明の思想論を展開していく。

本誌で連載が続いた「おしゃべりな訪問者」について、小松はのちに次のように自作解説している。「あれは小説じゃないけれども、京都の下町の古道具屋でタイムマシンを見つけて、秦の始皇帝だとかいろんな人物のところに行くんだ。最後は阿弥様にインタビューする。だからSFというのは可能性がまだまだ潜在しているような、面白いものだと思うんだね。『歴

史紀行』または『世界紀行風』にその時代にタイムマシンで行く」という「ハーフフィクション」だという、聞き手が作品の類分に躊躇を感じる本作に対して、小松は改めてSFのポテンシャルを強調し、右記の回答を返している。『おしゃべりな訪問者』では、小松が時空を超え、初期人類であるアウストラロピテクス、古代エジプト最後のファラオであるクレオパトラ、秦の始皇帝、アステカ国王モテクソーマ、元寇の高麗將軍金方慶、釈迦と空想の対面を果たし、架空のインタビューを行っている。生態学から文化に政治に宗教にまで及ぶ様々な話題で語られる内容になっている。

小松は、一九七〇年代前後は「紀行文まがい」な作品を相次いで起筆している。『日本沈没』の執筆期間中では、『SFルポ』と銘打ち、西日本をめぐりながら「エリアを行く」（『放送朝日』、63・9〜69・9）を連載し、また世界各地に遊び、現地での見聞を「歴史と文明の旅」（『文藝春秋』71・10〜72・12）に書きおこし、ルポ形式の日本文明論を著している。SF文学はジャンル小説として、SF専門誌にとどまらず、中間小説誌や総合雑誌などにも掲載されるようになり、さらなる浸透と拡散を果たした。『おしゃべりな訪問者』もその類に属し、小松左京の日本論を紐解くうえでは重要な一作である。

本稿では、『おしゃべりな訪問者』に関する作品分析を一旦括弧に入れ、その掲載媒体に焦点を当てたい。雑誌『終末から』の具体的な解題を試み、その歴史的意義について考察する。末

尾には本誌の執筆者一覧を付す。なお、総目次は終刊号に付されているのでそちらを参照されたい。

二、編集の狙い

雑誌創刊時の人的なつながりと雑誌の性格について、編集スタッフの証言をもとに確認しよう。本誌の編集長・筑摩書房の原田奈翁雄は、三号の「編集後記」で異例の長文を付し、創刊の意図を説いている。彼は『終末から』が「終末論ブームの引き金を引いた元兇の一つ」になったことを認めるものの、それは「終末的事実の大廉売り投げ売り叩き売り氾濫洪水」があったことだと述べている。盛行の終末論はその是非善悪が論じられても、根源にある「終末的事実」について十分に論及されないことを原田は非難する。

本誌は「終末論」の流行に便乗する商業誌に数えられ、批判を浴びた。例えば、古山高麗雄は「終末ムード」が原爆や公害によって醸成されたにもかかわらず、「鬼畜原爆、鬼畜公害と大きな声を出して反対しない」状況を指摘する。古山は、「終末論」そのものを流行にしようとする行為を、終末論の「娯楽化」と呼んで揶揄した。また江藤淳は、本誌を名指しにして「世の終わりを売り物にして商売をしようなんて、ずい分ずうずうしい」と皮肉った。大江健三郎は「われわれはただ、終末論の流行に浮足立って、結局このような危機にこそ『国益』を中

核に滅私奉公しようという、機械じかけの神の号令を待つのみというところにおちこみかけているのではないであろうか」と終末論の流行自体の不毛性を指摘する。さらに、「『展望』で新左翼ばりの編集をしていた原田奈翁雄が、このブームに今度は悪ノリして『終末から』なぞという雑誌を指揮している」と名指しで難する匿名時評も著された。原田が上記の断り書きを出したのは、そのような批判への反論としてである。

このように、筑摩書房より発行された『終末から』は、大手のハイブラウな出版社にしては例外的なふざけた小雑誌として扱われた。だが、筑摩の傘下に置かれるがゆえに、本誌は当時の文芸誌を賑わせた論者による寄稿を多く得ることができたことも事実である。特に創刊中心人物の原田は、筑摩で総合雑誌『展望』、文芸同人誌『人間として』（全十二号、70・3・72・12）を手がけてきており、そこで培った編集理念と築き上げた人脈網が本誌には引き継がれている。後に、原田は『展望』に触れつつ、それよりも「大衆的なところに問題を投げかけられる雑誌を作る一つのステップとして『終末から』を企画した」と述懐している。原田は、日本が現状のままだと、庶民の「生きのびる手だてもないではないか」という思いが本誌創刊の動機の中心にあったと述べ、「常に想像力の解放と、固定観念へのゆさぶりをめざしてきた」と振り返る。「終末」の名を冠した本誌に関しては、終末論のブームを内在的に批判し、閉塞状態におかれた戦後日本の大衆の声を代弁することが、原田の

編集意図の核心であった。

しかし創刊時、もう一人の編集者・松田哲夫は、原田とは別の腹案を持っていた。松田の回想『編集狂時代』（本の雑誌社、94・12）と『縁もたけなわ』がよく編集者人生で出会った愉快な人たち』（小学館、14・9）を参考にしつつ、『終末から』の編集意図をさらに探っていききたい。

松田が筑摩書房に入社したのは、一九七〇年のことである。松田は本誌創刊当時を振り返って、「水俣病をはじめとして公害、環境破壊」あるいは「食糧問題、エネルギー問題」が顕著となるにつれ、「高度経済成長への反省」とともに広がりつつあった終末論がこの誌名の背景にあると述べ、原田の回想を追認している。加えて松田が挙げているのは、「全共闘運動・新左翼運動の退潮」からくる、若い世代の「シラケムード」である¹²。

二人の編集者のスタート時点の問題意識は、概ね一致していたという。ところが、「から」の「ベクトルの向きが別の方角を指していた」と松田は述べる¹³。原田が終末論の超克とヒューマニズムの再建を企図していたのに対し、松田は「確固」とした「社会構造のほころび」を象徴する終末状況をまず受け容れておきたかったというのである¹⁴。原田は一九二七年生まれ、松田は四十七年生まれ。後に詳述するが、年が離れた二人の編集者の創刊理念に方向付けの相違があったからこそ、『終末から』は、世代とエコーを越え、イデオロギーを異にする文化人や

アーティストを糾合した雑誌として成立することができたのである。

野坂昭如が中心となる「破壊学入門」（一〇号）をはじめとして、本誌はその誌名に相応しく終末的なテーマの特集を毎号企画した。また、作家や編集部が当事者取材し、三里塚闘争、皇居侵入などといった若者による左翼運動の動向を取り上げるなど、七〇年代の世情を反映した内容が盛り込まれている。ここには、原田・松田二人の編集者各自の編集方針が色濃く具現化されている。毎号、終末現象に通じる新聞記事の切り抜きによって構成される「破壊MEMO」が、野坂によるコメント付きで掲載され、「終末事情」をザッピングするオピニオン誌的な性格を打ち出している。

また本誌は、作家たちの実験的な試作に場を提供し、彼らの活動範囲の拡大に力を発揮した。例えば、井上ひさし『吉里吉里人』の連載は、戯曲『ひよっこりひよたん島』がヒットした後、小説家に本格的に転身しようとした彼の挑戦であったことは、次節で見る。小松の『おしゃべりな訪問者』も、「架空インタビュー」というSF手法を用いた新形式の小説である。

中井英夫の連載「蒼白者の行進」（一〇九号）、「蒼白者の行進」筑摩書房、76・11）も注目される。幻想的な手法をベースに、東京渋谷を舞台に地理関係や町光景を事細かく描写し、アンデラに代表される七〇年代の時代性を反映した長編小説である。田辺聖子の「今様上方落語」（一〇七号）『おせい

さんの落語』筑摩書房、74・11）は、上方落語の形を取り入れ、オカルト的な話を盛り込んだ読み切り小説である。鈴木志郎康による連載「時間なき人々」（一、三、六、八号）は、詩人が手掛けた異色のルポルタージュである。後に「人間ルポ」と銘打たれ、『おじいさん・おばあさん』（筑摩書房、82・1）として単行本化された。

さらに本誌は、多様な書き手たちの新刊や新たな雑誌を告知し、当時の先端文化を発信した。エッセイ欄「DEAD END」では、一頁ずつ各分野の最新事情が「専門家」によって紹介されている。執筆者紹介欄「顔」では、各執筆者の近況・動向が略記されており、作家の執筆当時の動向を知るうえでの素材が提供されている。彼らによって創刊のリトルマガジンや新刊発行などの情報も併せて挙げられている。例えば、唐十郎による季刊誌『ドラキュラ』（新樹書房、73・11、創刊号のみ）、佐山淳編集のストリップ業界紙『芸報ジャーナル』、小林彰太郎編集の自動車専門誌『カーグラフィック（CG）』（二玄社、現在は版元を変えて継続中）、小島素治による季刊誌『サブ』（サブカルチャー専門誌）等々である。ここには、原田や松田が、ミニコミによるマスメディアへの対抗を進める狙いを持っていたことが端的に示されている。

このように『終末から』は、筑摩書房の人脈を動員し、豪華執筆陣を構えながら、積極的に若手表現者に発表の場を提供した。では、具体的にどのような内容が掲載されており、どのよ

うな人脈的な交配が行われたのかについて、次節より検討してゆきたい。

三、書き手たち

本誌のスタートを切ったのは、野坂昭如と編集部による特集企画「破滅学入門」である。松田によれば、企画段階で最初に思いついたのは、野坂の起用であったという。野坂は自ら「破滅芸人」と名乗り、破滅の人生哲学を様々なメディアで説くトリックスター的存在であった。松田が筆記・整理した野坂の放つ豪語は、「語り下ろしー子嘔み孫喰い」として特集の冒頭を飾った。その前の頁には、キリスト教終末的なイメージを描き出した横尾忠則による長尺絵巻「千年王国」が配されている。その他にも、前節で言及した「破滅MEMO」の新聞記事抜粋、公害問題を告発する関係者への取材を載せた「破滅白書」や、石牟礼道子と野坂の対談「いずれ後から参ります」が配置されている。こうして野坂を中心に、一二頁に及ぶ特集を企画したところから、『終末から』は始動した。終刊に際しても、野坂、石牟礼、渡辺京二が名を連ねている。そこに見られるのは、高度工業発展の歪みからくる公害問題や環境破壊をクローズアップし、それに対抗する姿勢である。

野坂は、その後も特集「ニッポン列島リターン……」（二号）「破滅か、変革か、……まだあきらめの時ではない」（三号）な

どと特集を組んでいくが、特集に関与していない号でも小説連載『八方鬼門』（四・九号）を続け、本誌を牽引した。当時の野坂は、伝永井荷風の戯作『四畳半襖の下張』を雑誌掲載したことで、裁判沙汰に巻き込まれていた。国家権力との対峙を経験した野坂は、本誌の創刊特集で「ぼく自身が破滅芸人の域から脱さない」と話し、「突破口はすべて若者にある」と期待を寄せる。終刊号でエッセイ「立候補か、自殺か」を寄稿した野坂は、破滅芸人からの脱出を期し、七四年には参院選への出馬を選んだ。『終末から』はこうして、野坂の表現人生における一つのターニングポイントとなり、破滅論を説きつつ変革を求める野坂のスタンスは、本誌の性格を規定したと言える。

なお、前文に触れた「破滅白書」は、当時農林水産省官僚だった西丸震哉が食料危機を訴え、文明破局論を唱える「腹ペコのバラード」を含め、瀬川富男「土から離れたらおしまいですよ」、八竹昭夫「ブタ、ニワトリに未知の異変が」など、政府官僚から現役の農民、漁師、学生、学者までの言葉が書き起されている。七号では、創刊号の「破滅白書」に登場した人物の一部を再訪し、証言を残している。ここでは西丸の他に、気象研究者・根本順吉の「これから十五年地球は冷える」と地球物理学者・竹内均の「予知だけでは意味がない」といった、当時終末論ブームで引っ張りだだった人物を起用している。西丸と竹内は、井上ひさし、野坂昭如などとともに、本誌の創刊記念集にも登壇している¹⁵。

竹内均は、小松左京が『日本沈没』を執筆した際のブレインとなった地球物理学者である。小松は本作の巻末謝辞に、竹内の著作から「数多くの啓発をうけ、参考」にしたと記している。その著作とは、のちに小松が明らかにするところによれば、『地球の科学』（上田誠也と共著、NHKブックス、64・4）である¹⁶。西丸は同時代の日本に終末論ブームを巻き起こした五島勉『ノストラダムスの大予言』（祥伝社、73・11）の映画化（東宝、一九七四年）に際し、アドヴァイザーとして参加したことも知られる¹⁷。後に小松編集の『異常気象—地球が冷える』（旭屋出版、74・5）には、彼と竹内・西丸・根本らによる対談がまとめられている。

さらに、井上ひさしによる「吉里吉里人」の連載は、本誌の誕生に助走をつけたのである。終刊号掲載のエッセイ「書げや、書げ、書げ……」で井上が明らかにしたところによると、彼は「高校二年のとき、ひと夏かかって『わが町』という題で原稿用紙五十枚の唄入り芝居を書き、文化祭実行委員会に提出した」という。それが「吉里吉里人」の母胎であった。東北の一寒村に現れた吉里吉里共和国の独立騒動に巻き込まれる三流作家のドタバタ劇『吉里吉里人』を、井上はすでに高校二年の頃から構想していたわけである。

松田哲夫は、NHK総合テレビで放送されていた連続人形劇『ひょっこりひょうたん島』（64・4・6〜69・4・4）のノベライゼーションについて井上と打ち合わせを重ねたという。この企

画は実現しなかったが、松田が『終末から』創刊の話を持っていたところ、井上は「吉里吉里人」の連載に乗り出す。同時に「現代を覆う管理社会体制、そのトータルな極点としての国家にむけて、どのようなアンチテーゼを突きつけることが出来るか¹⁸」という問題意識を抱いていた原田奈翁雄も、「吉里吉里人」の現実日本への反国家のブラックユーモア及びその批判精神に共鳴し、掲載に踏み切った。

『終末から』は多くの文学者を登場させ、彼らの終末体験を語らせている。阿部昭はエッセイ「個人的終末」（六号）を寄稿し、葛西善蔵の死を取り上げながら、私小説、批評などの文学的課題について論及した。七号の特集「死における生き方の研究」では、大岡昇平と石原吉郎が、自らの戦中の軍隊体験を顧みつつ対談「極限の死と日常の死」を行っている。そのほか、長部日出雄、柴田錬三郎、横溝正史などといった流行作家が、自作の創作経緯などを綴ったエッセイを寄せた。

このように本誌は作家をはじめ、学者や一般市民が環境破壊、異常気象、公害問題といった「終末」的現象について語った言葉を集録している。『吉里吉里人』にも見られるように、『終末から』は国家の強制力に対して異議申し立てを行なうスタンスを打ち出している。安保闘争から全共闘にいたる学生運動、ベトナム戦争、沖縄返還闘争などの政治問題を取り上げ、政治家、政治運動家あるいは運動当事者の視点から「終末」の問題を問い直す試みが行われている。

例えば、二号では、学生・黒井考人の風変わりな手記「月光仮面社会主義共和国建国秘録」が掲載されている。これは全国月光仮面共闘（全月共）という高校生などによる集団が蜂起し、権力中枢を制圧して臨時革命政府を樹立するという、「月光仮面」のパロディの形をとりつつ注釈にページ半分を割いた、全共闘がモデルとなった小説である¹⁹。また「経団連は包囲された！」と題するグラビアでは、小田実が発案したデモ「なにがベトナム復興だ！」が報じられている²⁰。三号の特集は、石原慎太郎・瀬戸内晴美・新島淳良・宇井純・小田実・羽仁五郎へのインタビューで構成され、三里塚青年行動隊を対象とする取材も組まれている。石原は「日本の公害キャンペーン」は、大衆に変革をもたらす力も持たないと語る。宇井はPCBにもたらされた環境問題への対処を痛烈に批判した。三里塚運動を支援し、直接訪問していた羽仁は、それを「終末論的認識を証明するような事件」だと捉え、国のあり方を問うた。

本誌には、小田実を中心とするベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）周辺の人脈が流れ込んでいる。創刊号では、真継伸彦がベ平連の招きで来日したベトナム統一仏教界の尼僧と、対談「仏教は生き方の哲学です」を行っている。その通訳を務めたのは小田だった。また、開高健は、自らのベトナム戦場前線での体験をユーモラスな「雑談」の形式で「びっしりは……イヤの巻」にしたためている。鶴見俊輔と井上ひさしは、対談「笑う透明人間―国家からの自立を求めて」（六号）を行っている。

小田・開高・小松左京・鶴見・真継が関わっていたのは、『人間として』²¹である。かつて原田奈翁雄が編集に携わっていた社会派の季刊同人誌であり、『終末から』はその後継誌としての性格を有する。この雑誌に登場した埴谷雄高、山代巴、江口幹、在日朝鮮人小説家金石範、呉林俊、高史明などは、『終末から』にも登場しており、両誌の間には人脈的な交差が確認される。

本誌は、執筆陣が連続性を有する一方では、“雑多性”も見える点が特徴的である。例えば、既に前文で挙げた七号に平岡正明が、ポナペ（現ポンペイ）の独立運動に反応し、ルポ「いつか王子さまが」を寄稿している。第二次世界大戦では日本とアメリカの間の激戦地となり、戦後アメリカの信託統治領となっていたという歴史を持つミクロネシアは、一九七〇年以降独立が進んだ。平岡正明は、ミクロネシア・ポナペ島の軍属遺児ダニエル・ロペスが戦後補償を求めて来日した際に支援を提供し、ミクロネシア独立運動に身を投じた。ルポでは、「現闘団」に赴くべく準備を進める平岡による戦況評が記されている。のちに『南方侵略論』（アディン書房、75・6）を著し、市民運動、戦後民主主義にアンチテーゼを提示した平岡も、小田実らとともに執筆陣を賑わしている点は興味深い。

四、アーティストたち

『終末から』は、文学、政治、社会の面における「終末」的現象にスポットを当てた一方で、前衛的な芸術表現あるいはサブカルチャーの発信の場としての性格を併せ持つ。連載小説に着目すれば、小松左京「おしゃべりな訪問者」の挿絵を担当したのは、「ナンセンス絵元祖」で知られる秋竜山である。田辺聖子「今様上方落語」は水木しげるが挿絵を描いている。井上ひさし「吉里吉里人」は佐々木マキの挿絵を配する。中井英夫「蒼白者の行進」の挿絵は建石修志による²²。このように、多くのイラストレーターが、小説の内容に相即してビジュアル面を豊かにした。味戸ケイコ、井上洋介、古川タク、後藤一之、南伸宏（伸坊）などの若手イラストレーターが表紙や本文のイラスト・カットを描いており、横尾忠則、宇野亜喜良、林静二、真鍋博、栗津潔などといった美術家やグラフィックデザイナーの名前も確認される。さらに、篠山紀信、立木義浩、木村恒久、東松照明などの写真家も、写真ニュースやエッセイ寄稿を通して積極的に誌面に参加している。

このようなアーティストたちが集まったのは、編集者の人脈に負うところが大きい。例えば、長年『幻想文学』の表紙絵を担当する建石修志は、編集部（はたけ）の祝部陸大（しづむ）の紹介で七二年に中井英夫と出会っていたという²³。また、三号以降の表紙絵を担当した味戸ケイコは、原田によって招聘された。榎木野衣は、味戸に関して「一九七〇年代の半ばごろから八〇年代初めにかけて一世を風靡した」と、イラストレーターとしての再評価を促

し、特に『終末から』終刊号の表紙絵に注目している。「味戸の絵は深く人々の心に沈み」、改めて見ると「いまもう一度その役割を取り戻しつつあるように思われる」と述べる榎木は、この表紙絵を「彼女の原点」と位置付けている²⁴。当時の味戸は、月刊誌『詩とメルヘン』（全三八五号、サンリオ、73・4・03・8）を主な舞台として活躍していた。第一回サンリオ美術賞の受賞後、まだ駆け出しだった味戸を原田は起用したのである。

さらに、『月刊漫画ガロ』（以下『ガロ』と記す、全三九三号、青林堂、64・9・02・10）周辺の人脈も無視できない。六四年創刊の『ガロ』は、これまで日本文芸社や三洋社などで貸本マンガの出版が専らだった編集者・長井勝一の「マンガ家たちに、精一杯やりたいことをやってもらいたい」「いいマンガを出版したい」²⁵という熱意の下で、白土三平の代表作「カムイ伝」を連載したほか、水木しげる、つげ義春、佐々木マキ、蛭子能収、杉浦日向子、赤瀬川原平といった個性的な作家を数多く輩出した。漫画研究家・竹内オサムは、「マンガ文化そのものにこだわる雑誌」「マンガ表現そのものに拘泥する雑誌」として、六〇年代後半に訪れたマンガブームをリードした「マニア誌」だと本誌を評価している²⁶。

『終末から』と『ガロ』の間にパイプをつないだのは『ガロ』編集部から筑摩に移った松田哲夫である。高校時代、秋竜山の作品に夢中になっていたという松田は、『ガロ』に出会い、水木しげる・つげ義春・勝又進の作品を楽しんでいたと述懐して

いる。その後、大学の先輩だった上野昂志と知り合う。『終末から』創刊号にエッセイを寄稿している上野は、当時すでに『ガロ』の人気コラム「目安箱」で文筆家としてデビューしていた。上野の紹介で松田も『ガロ』に出入りするようになり、水木しげるらと面識を得る。さらに松田は、『ガロ』の編集を通じて、六六年に設立された水木プロダクションで助手を務めていたつげ義春を知った。

『終末から』の編集を務めた松田は、上野昂志のほかに、『ガロ』を通じて知った写真家・長谷川元吉（小説家・長谷川四郎の長男）に文章の執筆を依頼している。さらに注目されるのは、「懐かしいひと」（二号）の描き下ろしをつげ義春に依頼していることである。「やなぎ屋主人」（『ガロ』、70・2・3）以後、寡作になっていくつげ義春にとつて、気を吐いた重要な一作である。飲み友達だったという林静一にも二号の絵巻「光夢恋」と三号のイラスト特集を依頼した。つげ忠男や佐々木マキも『ガロ』経由で『終末から』に登場した漫画家である。

もう一人『ガロ』出身で『終末から』の目玉企画を担った人物は、赤瀬川原平である。創刊から終刊まで連載が途切れずに続いた「虚虚実実話櫻画報」（↓「鏡の町皮膚の町」新聞をめぐる奇妙な話」筑摩書房、76・11）は、前身が『朝日ジャーナル』『ガロ』『現代の眼』などと掲載誌を渡り歩いてきた連載「櫻画報」だった。一九六七年、松田哲夫は赤瀬川原平に出会った。さらに赤瀬川が講師を務める美学校のアシスタントになり、

そこで南伸坊とめぐり合う。七〇年、赤瀬川・南と松田の三人は、『櫻画報社』を結成した。同年八月から、赤瀬川は『ガロ』編集長・長井勝一の紹介で、『朝日ジャーナル』に『櫻画報』²⁷の仕事を始めた。翌年、打ち切りとなり、最終回が回収されるという事件が起こった。その理由は、『櫻画報』が『朝日ジャーナル』を乗っ取り、同誌を画報の『包装紙』とし、版元である朝日新聞社を「古新聞、古雑誌」を生産する「古紙回収業者」と社の体質を揶揄するような過激な設定を行った上で、最終話（『朝日ジャーナル』、71・3・19）に「サテ今度は……ドコを乗っ取るかナ？」と新聞雑誌名を三百種以上書きで記載した結果、朝日新聞社が他社を乗っ取るかの印象を与えかねないと版元上層部の逆鱗に触れたことである。事件後、『ガロ』で『櫻画報』が三号（71・6・8）更新され、『廃刊』となった²⁸。その復刊となったのが、『終末から』を発表媒体とする「虚虚实実実話櫻画報」であった。復帰の媒体として選ばれた本誌の政治からサブカルチャーへという過渡的性格を鮮明に物語るその内容について、次節で詳しく検討したい。

一方、一九六九年、松田は嘱託社員として『現代漫画』（筑摩書房、『第一期』全一五巻、69・70、『第二期』全一二巻、70・71）の編集に携わり、手塚治虫・馬場のぼる・加藤芳郎などのマンガ家と知る。また同じ頃、松田は三一書房で呉智英と出会っている。呉は本誌で、辞書の形を取り入れ、時代の言葉を分析批判するコラム「集沫辞解」を著した。松田が「編集者

人生における、最も頼りがいのある相棒」と呼ぶ南は、『終末から』全号でイラスト・カットを担当している。松田の回想によれば、『終末から』は「リトルマガジン風総合誌をめざしていた」ため、「連載などの挿絵」以外の「誌面にも効果的イラストを配りたい」との考えのもとで、南と篠原勝之の二人を「専属絵師」に選んだという²⁹。

青年期から『ガロ』の愛読者だった松田は、のちに実際にその制作に携わり、そこで築き上げてきた人脈を『終末から』のビジュアル設計に活かした。松田は『終末から』を、マンガと活字とのミックスを実践する装置とし、当時の論壇の主流と競うための一つの陣地を敷いたと言える。一九七三年から翌年にかけての『ガロ』を見てみると、表紙絵は林静一が担当しており、秋童山「ナンセンスの缶詰」、つげ忠男「熱風」、呉智英「劇画列仙伝」、嵐山光三郎「人生相談」など、『終末から』の執筆陣が連載を持っていた³⁰。『終末から』はそれら『ガロ』周辺のサブカルチャーの担い手を取り込むことでビジュアルセンスを豊かにすると同時に、彼らに多様な場を提供し、結果的にマンガの表現の可能性を広げたのである。

なお、第四号では随筆特集に唐十郎・美輪明宏が稿を寄せているほか、暗黒舞踏の紹介も行われている。黒田康夫の撮影による、土方巽・ビショップ山田・磨赤児と大駱駝艦公演の写真には、天沢退二郎が一文を著している。こうした前衛的な表現者に活躍の場を与えたことも、本誌の特筆すべき点である。『終

末から』は、戦後における前衛美術、アンダーグラウンド文化、サブカルチャーの系譜を語る際に改めて注目すべき媒体なのである。

五、「虚虚実実話櫻画報」

先にも触れたが、赤瀬川原平は、本誌で連載「虚虚実実話櫻画報」（以下「虚報」と略す）を続けた。そもそも、その前身「櫻画報」および「櫻画報社」が成立する契機となったのは、「千円札裁判」とその裁判闘争である。赤瀬川は一九六五年に、千円札の模造作品を制作・配付したことで通貨及証券模造取締法違反として起訴され有罪になった。もともと、この出来事を「事件」化したのは、一九六四年一月二七日付の『朝日新聞』による誇張報道「画家が旧千円札を模造」に端を発する。六七年、「主犯」である赤瀬川に裁判についての原稿を依頼するため、松田哲夫は美術評論家の石子順造の紹介を通じて赤瀬川原平と知り合った。七〇年、「千円札裁判」の最高裁判所上告審で「表現の自由」を争点に法廷で闘った赤瀬川は、敗訴が確定した。同年、先述した『朝日ジャーナル』回収事件が起きている。

「櫻画報」の再出発を意味する「虚報」の初回に掲げられる「発刊の主旨」において、主筆・赤瀬川は「私たちは一度目に読んだ新聞にハタタリをかまされたまま、二度目に真実をのぞくこと」がないと皮肉る。続くエッセイ「新聞紙をめぐるウソの話」

では、赤瀬川は「新聞紙とお札というものは、印刷物に対する知覚をマヒさせることにおいてまったく兄弟関係にあるような「催眠術の印刷物」であると説く。赤瀬川によれば、通貨と新聞はいずれも虚構であるという点において等価である。千円札をコピーするのと同じように、「虚報」でコピーされているのは、新聞である。

「虚報」の「出版形態」は、「古新聞再生事業・桜紙新生事業」を主要業務とする「櫻画報社」が出版する月刊誌であるという設定となっている。八号では、朝日、毎日、読売、サンケイの四大大手新聞社のフォーマットを借用し、それぞれ宮本顕治が「大差で田中角栄氏降」し、自共党総裁当選、「琵琶湖上空で列島改造、新段階に」「日本、初の水爆実験」が行われる、野坂昭如が美濃部亮吉を破って「東京都知事」に就任し、「初の闇市都政が誕生」、「日本列島改造論」で「田中角栄氏にノーベル賞」が与えられたという、虚構^{ニセモノ}の新聞紙面が製作されている。種村季弘はそれらの創作を指して、パロディを超越した「情報による情報の包装」だと指摘し、「かつて極小の紙片に通貨制度を包装したように」「逆入れ子状に大新聞・巨大メディアを包装」する芸術であると評している³¹。この連載は、当時のジャーナリズム、情報産業に対する観察、思考が記録されており、赤瀬川芸術の一環として重要である。

「虚報」では、連載中に行われた「第二次千円札裁判」の一部始終も語られている。『美術手帖』に連載されていた「資本

主義リアリズム講座」六回目「紙幣類集」其三「国家に捧げるコンセプト・アル・アート」(73・9)において、「ダレにも出来ない楽しい工作・ダレでも出来る自分の千円札」のイラストが掲載されたのが、事の発端である。赤瀬川は「この工作を作らないように一生懸命がんばりましょう」と念を押したにも関わらず、実際に切り取って使用した読者が現れた。その後、赤瀬川は再び書類送検された(結果は不起訴)。

『終末から』四号(73・12)の「虚報」は、当の『美術手帖』の原文を全文掲載、この事件を取り上げる新聞記事をかき集め、新聞メディアに矛先を向けた。なかでも、『東京新聞』掲載の記事「ニセ千円札 通貨不安ひき起こす」(73・10・28)を四号、五号で取り上げ、反論の標的とした。『美術手帖』はその後、「企画の意図とは関係なく、結果的に社会に通貨不安をひき起こした」と謝罪文を掲載し、赤瀬川による連載を十一月号までに打ち切るとの声明を発表した(その原文も本誌に全文掲載)。「お詫び」をさせられた赤瀬川は「千円札を「作った」私は、たんに一つの人格であるだけでなく、一つの国家だったのである。私は日本国に通貨不安をひき起こすだけの力を有する、日本国と対等の組織体としての国家だったのである」(傍点は原文)と述べ、「赤瀬川原平資本主義共和国」(五号)の独立を宣言する。宣言後の連載は、発行所が「主筆」より「赤瀬川原平資本主義共和国」に変更される。

美術評論家・富井玲子は、「千円札裁判」を六〇年代赤瀬川

の最大の作品とし、それからその「続編」にあたる「第二次千円札事件」までの経緯を芸術の視点から考えれば、『模型千円札事件』という一個のコンセプト・アルな作品として位置づけている³²。「ニセ紙幣」を制作する芸術家から、法に則って貨幣を発行できる国への変身を意味する「赤瀬川原平資本主義共和国」の「独立宣言」は、製作期間が十年に及ぶこのパフォーマンスのコードとして、『終末から』に発表されたのである。

赤瀬川による一連の「櫻画報」の連載は、イラストレーションとエッセイ、戯画と活字の交叉する越境的な表現手法を以てジャーナリズムに切り込みつつ、単なる権力批判と一線を画したパロディカルな姿勢を示している。『終末から』は「廃刊」に追い込まれた「櫻画報」の掲載に格好な場を用意し、筑摩書房との間にパイプを繋いだ。赤瀬川は前掲『鏡の町皮膚の町』を筑摩書房から上梓している。なお、単行本の出版を機に、連載時にはイラストとして発表した作品を言葉に書き換えた上、その半分以上の内容を書き下ろした赤瀬川は、その後さらに純文学作家・尾辻克彦として活躍していく。現在、「櫻画報」の一連の作品群が『櫻画報大全』(新潮社、85・10)として文庫刊行されているが、そこには「虚報」は収録されていない。赤瀬川原平の創作を語る上で、延いては戦後前衛芸術を語る上で、『終末から』は改めて注目されるべき媒体なのである。

見てきたように、七三年に創刊された『終末から』は、その

誌名にふさわしく、終末論ブームとそれを批判する文脈に組み込まれ、九巻で終刊した短命な雑誌として今日に至っては忘却されつつある。しかし、多くの季刊誌、同人誌が創刊された時期でもある七〇年代に、『人間として』あるいは『ガロ』などの文芸・漫画同人誌と人脈的な交配を行う受け皿となり、当時の大衆文化を牽引する媒体の一つとなった本誌は、当時の様々な文化人、芸術家を呼び寄せ、重要な作品を数多く掲載した存在感のある雑誌であった。小説、散文、対談をはじめ、写真、絵画などと多様な表現ジャンルを配合し、SFから幻想、ルポルタージュまでと題材も多岐に跨がる本誌は、アンデラ文化、前衛芸術の流れを引くアーティストたちに、また雑誌に参加した作家たちに新鮮な刺激を与えた。小雑誌をして權威的なメディアと対抗、新たな表現の発信源として体制文化と対峙し、日本におけるサブカルチャー文化の形成拡大に貢献した本誌は、一九七〇年代のSF文学にとっても、若者世代に訴求力を持ち、読者を拡大するに適する舞台として無視できない役割を果たしたのである。

*『終末から』（創刊号・九号）は、二〇二二年一月現在、国立国会図書館や日本近代文学館などで閲覧が可能。

（じょ　よく／神戸大学大学院博士課程後期課程）

資料編 『終末から』 執筆者一覧

*絵・写真・聞書・対談等も含む。五〇音順、名前の下に寄稿作のジャンル、各人登場号数を順に記した。

*ジャンルを示す際に、エッセイ、イラストに関して、それぞれ〔散文〕Ⅱエッセイ、〔イラ〕Ⅱイラストと略して表記する。

*一覧の作成にあたり、「総目次」(『終末から』最終号)を参考にしつつ、一部一般読者／学生／仮名使用且つ調べがつかない投稿者による投書あるいは口述記録の作者名収録を省略した。また、異名を使用した寄稿者に関して、カッコ()内で本名・通称を示している。

*二号で企画「アンケート大特集…百人百説——破滅を前にこう生きる」が実施されている。その回答寄稿者名を本一覧の最後に併せて付す。

〔あ〕

青島幸男〔散文〕 6

赤瀬川原平〔散文・イラ〕 1～9全号

赤塚行雄〔散文〕 4

赤星亮衛〔イラ〕 2

秋吉敏子〔散文〕 8

秋竜山〔イラ〕 1・2・4・7・9

麻田カオル〔散文〕 1～5

味戸ケイコ〔イラ〕 3～9

麻生薫〔散文〕 7

あづまかずみ〔散文〕 1

阿奈井文彦〔散文〕 7

阿部昭〔散文〕 6

甘木田力〔散文〕 1

天沢退二郎〔散文〕 4

荒木経惟〔散文〕 1

横喜八〔イラ〕 5

嵐山光三郎〔散文〕 1・3

荒畑寒村〔対談〕 4

家田雅司〔イラ〕 8

伊賀洋昭〔散文〕 4

幾野宏〔翻訳〕 3

池田節子〔散文〕 7

井坂紘〔散文〕 5

石井彰〔散文〕 9

石井出かず子〔散文〕 9

石原慎太郎〔インタビュー〕 3

石原吉郎〔対談〕 7

石牟礼道子〔対談・詩〕 1・4・9

五木寛之〔対談〕 9

糸川嘉則〔対談〕 1

井上ひさし〔小説・散文〕 1～9全号

井上洋介〔イラ〕 4～9

猪野千代子〔散文〕 5・9

今井美沙子〔散文〕 3

今村吉造〔対談〕 1

- 今村庄〔対談〕 1
- 色川大吉〔散文〕 6
- 岩崎ヒロマサ〔散文〕 5
- 岩田薫〔散文〕 4
- 岩月澄江〔散文〕 8
- 岩本久則〔イラ〕 5、9
- 宇井純〔インタビュー・ルポ〕 3・4
- 上野圭一〔散文〕 3・9
- 上野昂志〔散文〕 1
- 上野晴子〔散文〕 9
- 上野英信〔対談〕 3
- 宇治田一也〔インタビュー〕 8
- 内田栄一〔散文〕 3
- 内田良平〔散文〕 6
- 海辺ゆき〔散文〕 9
- 梅木通雄〔散文〕 1
- 江口幹〔散文〕 6
- 榎本一雄〔散文〕 9
- 大石芳野〔写真〕 3
- 大岡昇平〔対談〕 7
- 大門一樹〔散文〕 6
- 大久保隆史〔写真〕 6
- 大瀧憲一〔散文〕 9
- 大牟羅良〔散文〕 4
- 小笠原裕二〔イラ〕 5
- 岡田理〔散文〕 1
- 岡宏子〔散文〕 7
- 岡部伊都子〔散文〕 4
- 岡本好古〔散文〕 3
- 小山内宏〔対談〕 7
- 長部日出雄〔散文〕 3・4・7
- 尾澤彰宣〔散文〕 9
- 小沢遼子〔対談・散文〕 1・9
- 小田実〔インタビュー〕 3・6・8
- 小野憲次〔散文〕 4
- 小野博通〔散文〕 3、9
- 小野雄一〔写真〕 6
- 〔か〕
- 開高健〔散文〕 1
- 片山健〔イラ〕 3
- 勝又進〔イラ〕 4
- 加東康一〔対談〕 8
- 加藤次郎〔散文〕 6
- 金戸真二〔散文〕 7
- 加納良昭〔散文〕 9
- 鎌田慧〔ルポ〕 6
- 唐十郎〔散文〕 4
- 川仁宏〔散文〕 1
- 川本三郎〔散文〕 4
- 神吉拓郎〔散文〕 5
- 岸田類〔散文〕 5
- 北沢史朗〔散文〕 8
- 北中正和〔散文〕 5
- 金正坤〔写真〕 9
- 木村恒久〔写真〕 1・2・6・7・9
- 金仮面〔散文〕 2、6
- 楠祭一郎〔散文〕 4
- 呉智英〔散文〕 1、9全号
- 黒井考人〔小説〕 2
- 黒田征太郎〔イラ〕 3
- 黒田康夫〔写真〕 4
- クワブラ・ウンタワフ〔散文〕 6
- 高信太郎〔イラ〕 3
- 耕田和子〔散文〕 3
- 河野博臣〔散文〕 7
- 高史明〔散文〕 6
- 小島素治〔散文〕 2
- 後藤一之〔イラ〕 3、5

小林彰太郎〔散文〕 2
 小林トミ〔散文〕 3
 小松左京〔小説〕 1・2・4・7・9
 五味正彦〔散文〕 2・9
 〔セ〕
 斎藤守弘〔対談〕 3
 櫻井順〔散文・写真〕 1・5
 桜井昌一〔散文〕 1
 佐々木マキ〔イラ〕 1・9全号
 佐山淳〔散文〕 2・3
 山谷亭怨朝〔落語〕 5
 三里塚青年行動隊〔インタビュー〕 3
 篠原勝之〔イラ〕 1・4・6・9
 篠山紀信〔写真〕 5
 篠山豊〔散文〕 5・6
 柴田良平〔散文〕 1
 柴田錬三郎〔インタビュー〕 7
 下重暁子〔散文〕 8
 東海林さだお〔散文〕 1・2
 ジョン・ロバーツ〔散文〕 8
 白雪姫〔散文〕 3
 仲愛学園再建委員会 5

深海魚〔散文〕 2・3・5
 末永泉〔散文〕 7
 菅原文太〔散文〕 5
 杉本哲郎〔対談〕 7
 鈴木いづみ〔散文〕 1
 鈴木志郎康〔ルポ〕 1・3・5・7・9
 鈴木清順〔散文〕 2
 鈴木武樹〔散文〕 3・8
 鈴木正穂〔散文〕 3
 世界革命戦線情報センター 6
 瀬川富男〔散文〕 1・7
 瀬戸内晴美〔散文〕 3
 〔た〕
 タインブル〔ドキュメント〕 3
 高島公芳〔対談〕 4
 高梨豊〔散文〕 3
 高橋暁正〔散文〕 9
 高橋矩彦〔イラ〕 6
 高原亮治〔対談〕 9
 滝口修一〔散文〕 4
 滝口修造〔談話〕 3
 滝田ゆう〔イラ〕 3・4

竹内均〔散文〕 2・7
 武田泰淳〔聞書〕 4
 武林伍二〔散文〕 5
 田尻宗昭〔散文〕 2・7
 ダディ・グース〔イラ〕 2・3
 建石修志〔イラ〕 1・9全号
 田中省吾〔ルポ〕 6
 田辺聖子〔小説〕 1・7
 谷岡ヤスジ〔漫画〕 5
 種村季弘〔散文〕 2
 玉川洋次〔小説〕 9
 丹谷未歩〔散文〕 9
 千葉督太郎〔イラ〕 6・9
 つげ義春〔イラ〕 2
 つげ忠男〔イラ〕 3
 つのだ☆ひろ〔散文〕 4
 椿宏治〔散文〕 8・9
 鶴見俊輔〔対談〕 6
 ティック・マンダラ〔対談〕 1
 天日正次〔聞書〕 9
 戸井十月〔イラ〕 3・4・6・8・9
 東松照明〔散文・写真〕 1・3・5・7
 徳丸光顕〔散文〕 4

〔な〕

中井英夫〔小説〕 1〜9全号

中井健栄〔散文〕 8

中川志郎〔聞書〕 2

中島通子〔散文〕 8

長田紀生〔散文〕 2

中野康雄〔写真〕 2・9

中村敦夫〔散文〕 3

中村了太〔散文〕 9

中山千夏〔対談〕 1

新島淳良〔インタビュ〕 3

西丸震哉〔散文〕 1・7

根本順吉〔散文〕 2・7

能吉利人〔櫻井順〕〔写真〕 3・4・6

能盗人〔櫻井順〕〔写真〕 5

野坂昭如〔対談・散文・小説〕 1〜9

全号

野間宏〔散文〕 9

花山栄太郎〔散文〕 2

羽仁五郎〔インタビュ〕 3

埴谷雄高〔聞書〕 2

ばばこういち〔対談〕 8・9

馬場のぼる〔イラ〕 3・5

浜田弘〔聞書〕 4

林静一〔イラ〕 2・3

林秀樹〔散文〕 3

速水良〔散文〕 4

原島正国〔聞書〕 4

原田奈翁雄〔散文〕 8

原田力男〔散文〕 5

東君平〔散文〕 1・2

日比逸郎〔聞書〕 2

俵藤正克〔散文〕 2

平岡正明〔ルポ〕 7

平山雄〔インタビュ〕 9

福島菊次郎〔散文〕 6

藤岡義隆〔散文〕 1

舟本恵美〔散文〕 3

古川タク〔イラ〕 7

古屋能子〔散文〕 8

祝部陸大〔散文〕 8

星野芳郎〔座談〕 6

〔ま〕

前田常作〔イラ〕 6・9

前田武彦〔散文〕 4

前田俊彦〔ルポ〕 6

榎木高司〔散文〕 1

益田勝実〔散文〕 8

松井不朽〔散文〕 6

松井やより〔散文〕 5

松浦総三〔散文〕 8

真継伸彦〔対談〕 1

松下竜一〔散文〕 6〜9

松本隆〔散文〕 5

松本路子〔散文〕 9

三上美樹〔対談〕 1

三木卓〔散文〕 5

水木しげる〔イラ〕 1〜7

三留理男〔散文〕 8

水俣病を告発する会 4

南伸宏〔イラ〕 1〜9全号

峰彦一〔散文〕 1〜5

三宅榛名〔散文〕 4

宮松宏至〔散文〕	6	吉岡治〔散文〕	5
美輪明宏〔散文〕	4	吉岡忍〔散文〕	1・8・9
村上知彦〔散文〕	1・4	吉倉伸〔散文〕	1
毛利子来〔対談〕	9	吉沢真智子〔小説〕	3
森崎和江〔散文〕	6	吉田洋一〔散文〕	2
森ただし〔ルポ〕	6	吉田ルイ子〔写真〕	2・8
守屋正〔散文〕	1	吉野あづま〔散文〕	3・4
		吉増剛造〔散文〕	3
〔や〕		ヨネヤマママコ〔散文〕	5
矢川澄子〔散文〕	3・4	渡辺京二〔散文〕	9
八竹昭夫〔散文〕	1・7	和田昌樹〔散文〕	3
山岡重子〔聞書〕	5	E・K・ロス〔ルポ〕	7
山口武秀〔対談〕	7		
		山口はるみ〔イラ〕	9
		山口文憲〔散文〕	3
		山崎三郎〔散文〕	5
		山崎朋子〔散文〕	6
		山代巴〔ルポ〕	2
		山根一眞〔散文〕	8
		山之内桂輔〔散文〕	9
		山本邦明〔イラ〕	5
		山本美智代〔散文〕	3・6・9
		山本護久〔散文〕	5
		横尾忠則〔散文・イラ〕	1・3・7
		横溝正史〔散文〕	7
		横山好夫〔散文〕	6

【特集Ⅱ2 アンケート大特集】百人百説——破滅を前にこう生きる

会田雄次 秋山庄太郎 秋山ちえ子 荒畑寒村 いいだもも 泉大八 稲垣足穂 井上ひさし 岩下志麻 植草甚一 上野英信 梅原猛
永六輔 大島渚 大橋巨泉 大藪春彦 萩原賢次 桶谷繁雄 小山内広 小沢昭一 小沢遼子 小田実 落合恵子 尾上菊蔵 桂米朝
金子光晴 上坂冬子 川上宗薫 草柳大蔵 後藤明生 後藤みな子 駒田信二 斎藤栄三郎 佐藤慶 サトウサンペイ 沢村貞子
三遊亭円楽 獅子てんや 下重暁子 笑福亭仁鶴 曾野綾子 高崎一郎 高田浩吉 高峰秀子 滝田ゆう 武見太郎 田中真理
谷川俊太郎 玉川良一 長新太 塚本邦雄 月亭可朝 手塚治虫 寺山修司 殿山泰司 富永一朗 中田ダイマル 中田ラケット
中西悟堂 中村とうよう 中村八大 なだいなだ 浪花千栄子 野尻抱影 花菱アチャコ 羽仁進 馬場のぼる 林房雄 林家三平
東君平 福田恆存 富士正晴 富士真奈美 藤田敏八 フランキー堺 フランク永井 ペギー葉山 星新一 星野芳郎 北條誠
松田道雄 松任谷国子 真鍋博 丸尾長頭 三木鶏郎 三鬼陽之助 美濃部亮吉 武者小路実篤 八木治郎 山崎朋子 山田慶児
山田風太郎 吉行淳之介 淀川長治 無署名三氏

注

- 1 一号から七号にわたって連載は続いたが、そのなか三号は小松が『日本沈没』第二部の構想で、現地考察にオーストラリアに旅していたため、休みだったという。
- 2 詳しくは、拙稿「小松左京『日本沈没』論——核時代の想像力——」(『国文論叢』第五四号、神戸大学文学部国語国文学会、19・3)を参照。
- 3 小松左京『小松左京自伝——実存を求めて』(日本経済新聞出版社、08・2)、一九九頁。
- 4 『おしゃべりな訪問者』を収録した『小松左京全集32——歴史と文』
- 5 『SFルポ』に関して詳しくは、拙稿「ニッポンをめぐる妄想——小松左京の『SFルポ』における戦後日本像——」(『国文論叢』第五六号、神戸大学文学部国語国文学会、21・3)が参照されたい。
- 6 古山高麗雄「ありえない話——連続企画(『終末』のムード)」(『サンケイ新聞』、73・8・10)
- 7 江藤淳「こもんせんす——『終末論』さわぎ」(『週刊現代』、73・9・6)、「こもんせんす」北洋社、75・1)

- 8 大江健三郎「状況へ―悪疫年^{フレイグイヤール}」(『世界』、73・9↓「状況へ」岩波書店、74・9)
- 9 匿名「大波小波」(『東京新聞』73・7・31)
- 10 大本至(聞き手・構成)『雑誌で読む戦後史』(新潮社、85・8)、二六三頁。
- 11 原田奈翁雄「編集後記」(『終末から』終刊号↓「終末からの出発―人間を信じ得るか」明治図書出版、75・5)二二七―二八頁。
- 12 松田哲夫『編集狂時代』前掲、二二三頁、および松田哲夫「縁もたけなわ―ぼくが編集者人生で出会った愉快な人たち」前掲、一二〇頁を参照。
- 13 松田哲夫『編集狂時代』前掲、二二四頁を参照。
- 14 松田哲夫『編集狂時代』前掲、二二三、二二四頁を参照。
- 15 「終末から」(二号、73・8)、一六三頁で当時の状況が記載されている。
- 16 小松左京『SF魂』(新潮新書、06・7)、一二六頁を参照。
- 17 唐沢俊一「特集『破滅学入門』(特集構成・野坂昭如)」(と学会・編『トンデモ本の新世界―世界滅亡編』文芸社、12・12)八六頁を参照。あわせて、安藤健二「封印作品の謎」(太田出版、04・11)、一〇八―一五六頁も参照されたい。
- 18 大本至「雑誌で読む戦後史」前掲、二六二頁。
- 19 川又千秋は「SFスキナー―『手を上げる人間』^{キールドアップ パーソン}」(『SFマガジン』早川書房、75・1)で、「アジアの国家と共同体に生み落とされた無政府主義(革命無罪主義)」を象徴する「日本中の
- 20 「ベ平連 ホコ先を大企業に―総本山^{ウイダッシュ}へ抗議デモ「公害・経済侵略やめる」」(『朝日新聞』73・6・17)にも小田実が率いたこの抗議デモの様子が記録されている。
- 21 「人間として」には、他に高橋和巳、柴田翔も同人として参画している。
- 22 単行本の装幀も建石修志の手になっている。
- 23 本多正一編「中井英夫年譜」(中井英夫『新装版虚無への供物(下)』講談社文芸文庫、04・4、五四八頁)で、次の項目が記述されている。「一九七二年(略)八月十六日、筑摩書房の祝部陸大の紹介によりはじめて建石修志と会う」とある。
- 24 榎本野衣他編『日本美術全集19―拡張する戦後美術』(小学館、15・8、二七三頁)を参照。
- 25 長井勝一「ガロ」編集長―私の戦後マンガ出版史」(筑摩書房、82・4)、一〇頁。

- 26 竹内オサム『戦後マンガ50年史』筑摩書房、95・3、一〇五頁。
- 27 『櫻画報』の一号から三号（『朝日ジャーナル』70・8・2（23）までは、「野次馬画報」と題されていた）。
- 28 赤瀬川原平「櫻画報包紙一覧表」（『櫻画報大全』新潮社文庫、85・10）、「櫻画報社の乗っ取り作戦」（前掲『編集狂時代』）、「マニア誌の創刊」（前掲『戦後マンガ50年史』）、「宮森雅照」（『朝日ジャーナル』）「回収事件顛末—雑誌にとつての編集権を考える」（『出版の検証—敗戦から現在まで1945〜1995』文化通信社、96・12）を参照。
- 29 南と篠原に関する記述、評価については、前掲『縁もたけなわ—ぼくが編集者人生で出会った愉快な人たち』三七二頁を参照。
- 30 作品名や連載時期等は青林堂編『「ガロ」という時代』（14・9）を参照した。
- 31 種村季弘「メービウスの帯の肌ざわり—『赤瀬川原平の冒険』展に寄せて」（名古屋市美術館編『赤瀬川原平の冒険—脳内リゾー ト開発大作戦』「赤瀬川原平の冒険」実行委員会、95・2）
- 32 富井玲子「赤瀬川原平の冒険・活字メディア篇—《模型千円札事件》から《超芸術トマソン》へ」（文藝別冊『赤瀬川原平—現代赤瀬川考』河出書房新社、14・10）